

子どもは「社会の宝」である。急速な少子高齢化の中、誰一人としてその育ちが阻害されることであってはならない。しかし「社会」という広がり「人ごと」にしてしまっていないだろうか。

私は施設に奉職する前の10年間、公立中学校の教諭だった。教職を辞める際のPTA主催の送別会の席上、地域の名士から「施設(養徳園)の子は親が見捨てた子だよ。どつてそんな子のために教師の職を捨てるんですか」と言われた。



児童養護施設は県が所管するがゆえに、家庭で暮らすことができない子どもが県

内各地から入所し、施設が所在する地域の学校に通う。時に情緒が混乱し、特別な支援を必要とする子どもも入所する。教員時代の同僚が「〇〇市に施設はないのか」と本音を漏らしたこともあった。

自分と関係のない子、まして親が養育の責任を果たせな

地域に「児童擁護」機能を

い。あるネグレクト状態にある子どもの母親に「もう少し子どものために時間をつくってほしい」と求めたところ、「私は子どもを施設に入れていないだけでした」と返された。施設入所は親としての存在を否定されたことになってしまっただ。

夫婦共働きが当たり前になり、高齢者も仕事を時代を迎え、地域に余力のある人が少なくなった。かつて地域の大人の手によってなされていた学童保育も民間業者に委ねられている。子どもの育ちを支える地域社会のネット

縁者の手によって私の養育はなされたが、祖母の病によって立ち行かなくなった。それから3年余り施設で生活することになるが、その期間は私の家族が再生するために欠かせない時間だった。

い子の育ちに世間の関心は低い。親に疎まれ、育ってきた地域から離され、新たな生活の場となる地域からも歓迎されないとしたら、その子はいったい誰を信じ何を頼りに生きていけばよいのだろうか。親もまた、児童養護施設を利用することへの抵抗は根強

「親はなくとも子は育つ」と言われたように、かつて地域社会はそれぞれの子どもを一人前の社会人にしていくような力を持っていた。今、それを地域に期待することは難しい。PTAにしろ、育成会にしろ、できればそうした活動を避けたい大人が増えてい

ワークは危機にひんしている。だとして、誰か(行政も含めて)が意志を持って子どもを育て上げる仕組みをつくっていかねばならぬ。私は3歳で母親を事故で失い、5歳で養徳園に入所した。母親の死後の2年間は、親戚

最後の誓」と言われている。しかし最後の誓はあくまでも家庭であるべきで、施設はそれを「担保」するものでありたい。長年にわたって数多くの子どもを育て、大きな困難を抱える親たちを支えてきた休むことのない子育ての専門機関である。もっと身近な施設として、その機能を地域の子育て支援に生かしていくことが求められている。(県児童養護施設等連絡協議会会長)